

研究の栞

日本古建築研究の栞 (第二十七回)

天 沼 俊 一

第三十二 幣 軸 (下)

室、町時代

また同様である。第二〇九圖は興福寺五重塔初重東側ので、だまつてこの寫眞をみせられたら、平安時代と思ふ人はないとしても、鎌倉か室町か判別がつけにくからうと思はれる。どうも鎌倉と室町とは、木鼻や懸魚や墓股等と異り、幣軸などになると同じ様だから中々見分けがつけにくい。

第二一〇圖またさうである。これも知つてゐる

からさう見えるが、むつかしいものゝ一つであらう。注意すべきは出たところを圓いところと、其幅が同じ位(一・二〇強)なこと、この點に於いては後に記す如く江戸時代のに似てゐる。既に當代に斯様なのが例へ一つでも存在する以上、室町時代からかうなりだしたといへなくもあるまい。

もう一つ同じ様な例ではあるが、第二一一圖に於いて、出たところの幅も前圖等に比べると遙に狭いから、これで模樣がなく、古ぼけたのが倉の

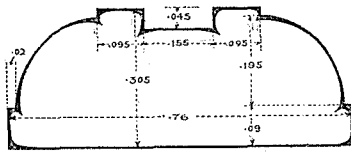
隅からか、天井裏からでも出てきたならば、時代の鑑別は餘程熟練した人でないと、甚だ面倒であらう。ごこの塔のか堂のか知らないでも、これ丈け模様があれば、先づ誤ることも少なからうが、さもなくば全く厄介ものである。

第二一二圖は幣軸のつけ方が餘程變つてゐる。

これはことによつたら桃山時代かも知れぬが、室町としておいた方がよさうだから、こゝに記すのである。一乗寺三重塔の南の石段を下りずに、土藏にそひ緩勾配の坂を東に下りると、左手にある一間社である。圖は正面の一部で、幣軸は柱に沿ひ、上の方も長押に添ふてゐるのに變りはないが、普通幣軸と扉との間は方立であるべきのが、これは扉に近く角柱が立つてゐる。即ち幣軸の外側にあるべき角柱は、この場合にはすつと内の方へ入つてしまつた、故に幣軸と角柱との間に大きな羽目ができたのである。夫れは先づいゝと

しても、正面の柱間が割合に廣いから、普通の場合と同じ様に取扱へばいゝものを、さうしなかつたものだから、いやに幅ばかり廣すぎて、甚だみよくない結果になつたのである。

時としてはまた半柱と幣軸とを一木より刻みだしたゝめ、正面からみると例へば第二百十二圖の



京都府宇治郡宇治村大平交神社、建前社許波多神社
木殿内外障境幣軸柱木平斷面圖(一・二・二二)

様に、ほんとうの柱の兩方にほんとうの幣軸をつけたのど何等變りはないが、實はこゝに挿入した圖の様に裏面からは全くのごまかしものにしたのが五箇庄鎮座の許波多(Koyata)神社にある。斯様なのは澤山に例があるかどうか

私は知らぬが、別段見えるところではないから、かうしておけば材料も儉約になるし、無駄な手數も省けて至極賢い方法である。序ながらこの神社

内陣安置の厨子の扉に「永祿五年壬戌九月二十六日造立之」「五箇庄楊大明神」の墨書があり、社殿も其頃のものとして差支ないやうである。

桃山時代

の好例を第一九八・一九九圖にだしておいた。書寫山圓教寺塔頭十妙院の書院出入口の三方を巡つて、形の甚だよろしいのがついてゐる。この書院が桃山時代だといふ文獻があるかないか私は知らない。さうして今本坊として使つてゐるから、大

分あつちこつちは手は入つてゐるが、この扉の附近は元のまゝと思はれる。これはどうしても當代に入るべきものと思へられる。圖は可なり大きく書いておいたから、形等は見れば自然に判る筈である。説明の要を認めない。此れ等の圖は木下助三郎氏に依頼して實測して貰つたのを、適當に取捨して引き直したものである。一々書かなかつたが以前も二三回かういふ事があつた、將來もある

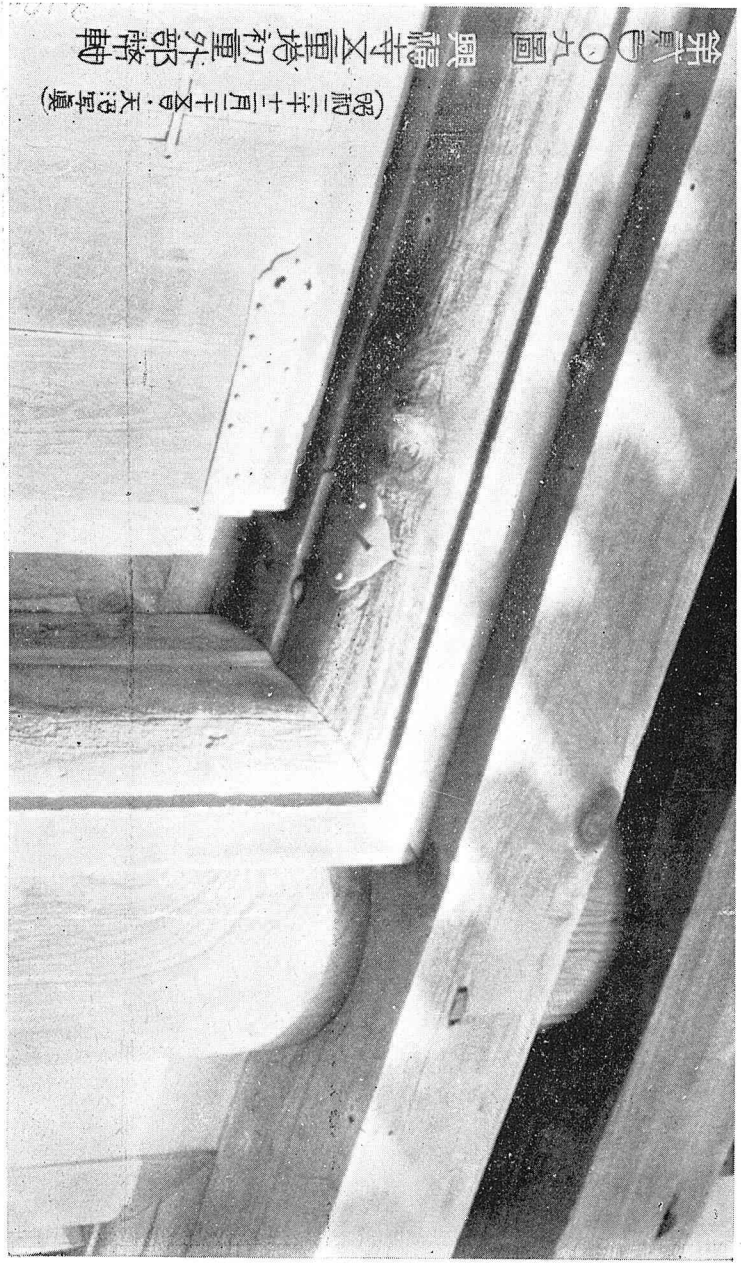
かも知れないから、此の機會に其由を記し感謝の意を表しておく。

當代は柱の面にも几帳面があつたから、幣軸のも其傾向があつたといふのではないが、前代迄の圓いところが多少角張つてきたのがある。京都市高臺寺靈屋の夫れ(前號第一八二・一八三圖參照)や、天野山金剛寺御影堂出入口のなどは(第二圖)、共に其方の好例となすに足らう。

江戸時代

またさうである。現今では古い式の幣軸を造らせやうとしても、職工の方でこちらの思つてゐる様に削らぬから、圓い様に圖をかいておいても、できたものはさうなつてゐぬ場合がある。

前代のご當代のとは、大して違ひがないとみてよからう。當代のは今圖も寫眞も持合はせがなくて掲げることができぬ。裝飾は澤山で金の金具等を打つた、見たところ立派なのはあらうが、形と



築威の丸圖 興福寺之重塔初重外部幣軸

(昭和二十一年十二月十日・天沼厚慶)



第貳百十圖 興福寺東金堂正西出入口格軸 (昭和二年五月天宮寺藏)

第貳百十卷圖 常樂寺三重塔初重内部南側幣軸 (昭和三年二月二十日天沼亨撮影)

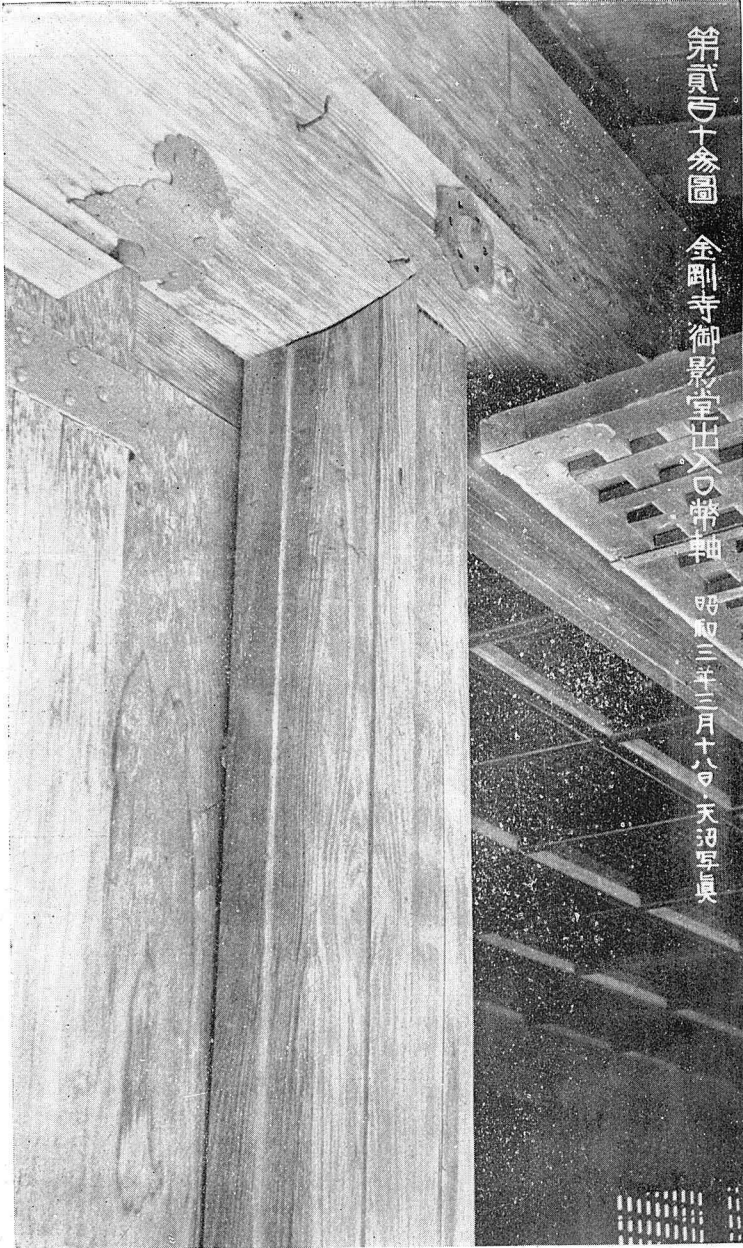




第貳百十參圖

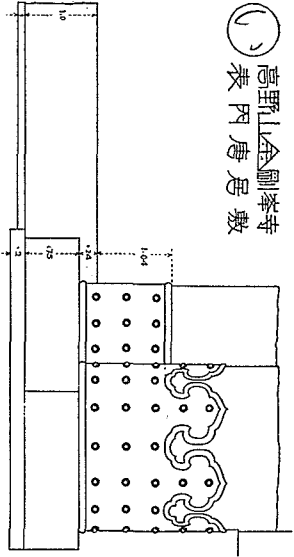
金剛寺御影堂出入口幣軸

昭和三年三月十八日天沼写真



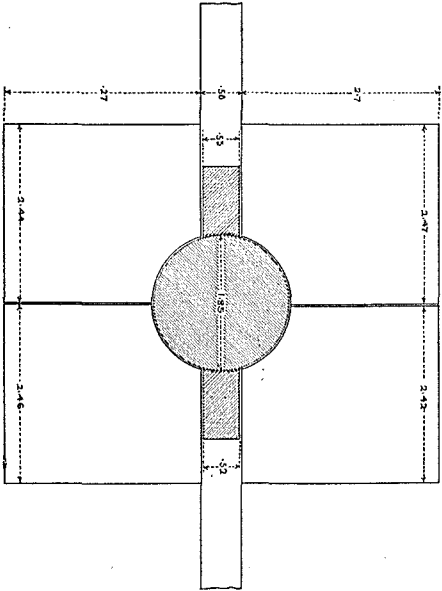
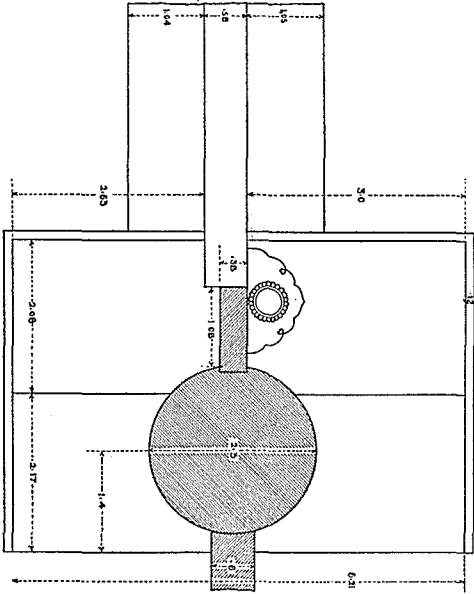
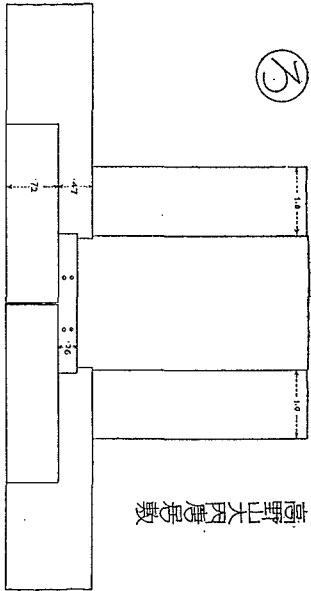
17

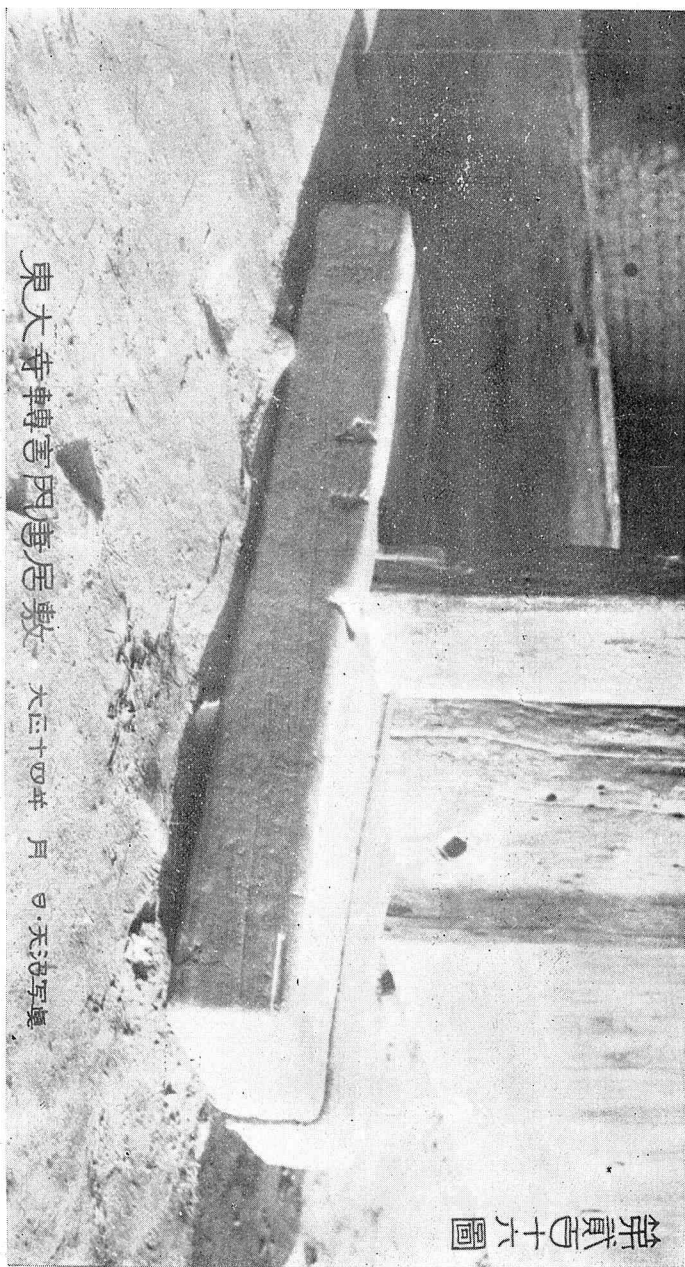
高野山金剛峯寺
表内唐足敷



18

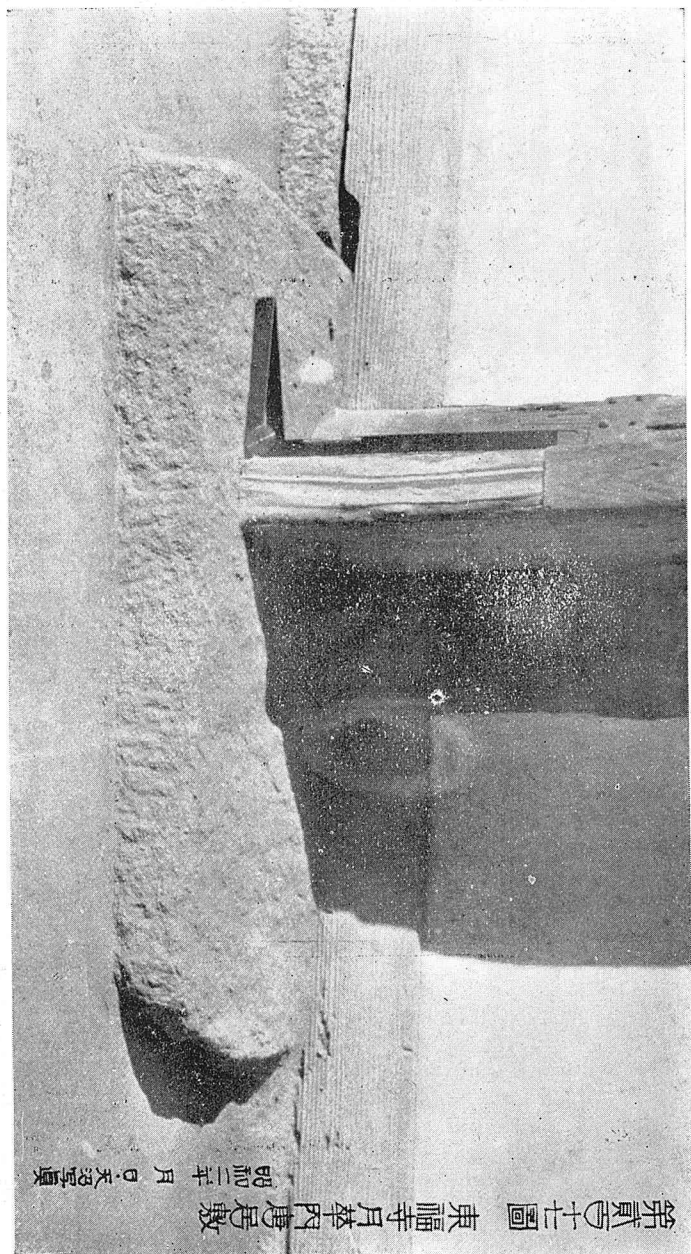
高野山唐足敷





築威弓十六圖

東大寺轉宮内唐居敷 大正十四年 月 日・天泷写真



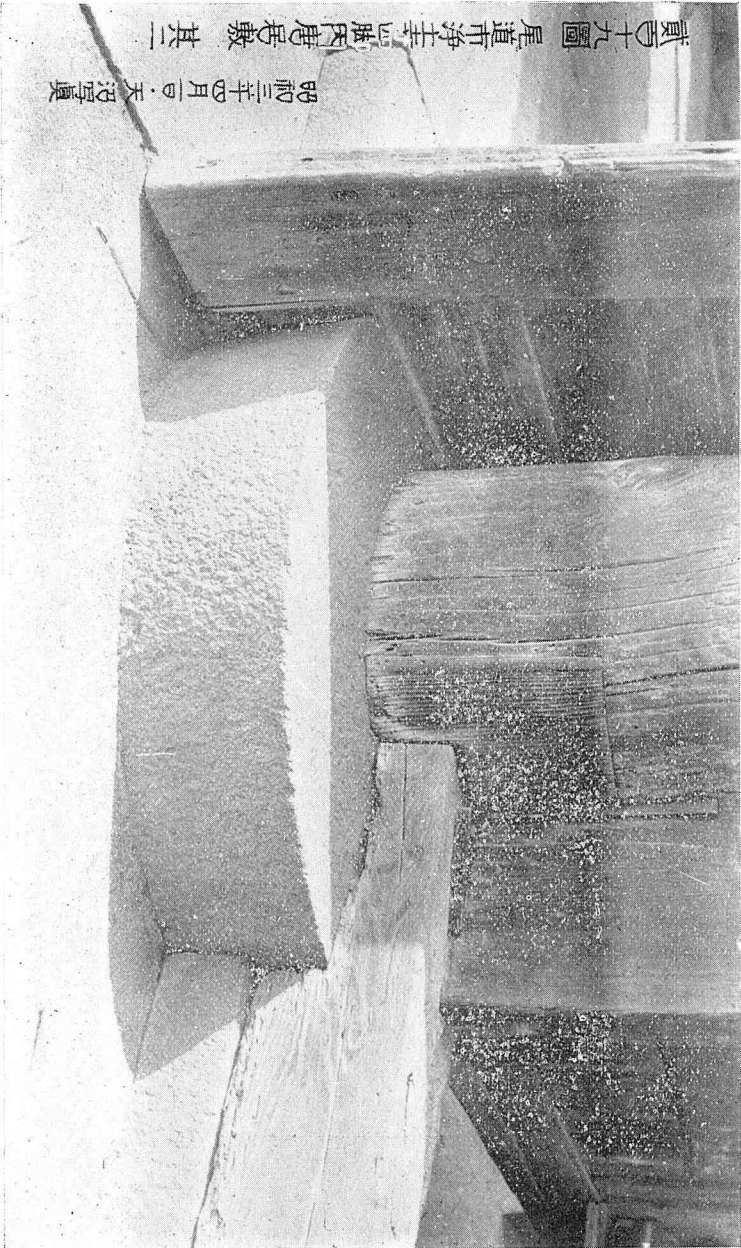
第貳拾七圖 東福寺月琴内唐尼敷

昭和二年 月日 天野野原



築貳〇六圖 尾道市浄土寺四脚内唐尾敷 其一

昭和三年四月、天沼野撰



貳十九圖 尾道市浄土四天王寺曼荼羅 其二

昭和三年四月・天沼野真

しては大したものではない。昔しの様な垢抜けのした秀高なものはある筈なく、圓いところの角張つた桃山の續きである。播摩の書寫山圓教寺境内本多家の廟に好例があるから、何れ他日どこかで圖示する折もあらう。

當代にできた雛形本にかいてある幣軸の圖をみても、兩方のでたところは益々廣くなり、圓いところは思ふ様にさうなつてゐず、大分角張つた圖がかいてある、これでも時代による趣味の變遷が判るのである。

私は嘗て木割建築に明るいある人に、新しい幣軸の割出方は、出たところの幅が殆んど全體の半分ある様に思へる、即ち正方形の木口を有する木を「田」の字形に墨をして、其小さい一つの角をいくらか圓めると、丁度所要のものができる様であるが、果してさうかどうかと訊ねたところ、普通出たところは全體の幅の半分にとるのだと教へ

てくれた。圖はないがこれでよく判るであらう。そこいらにざらにある當代の新らしい建物をみれば、實例に多く出遇ふであらう。

* * * * *
述べ來つたことをつゞめると、先づ大體次の様にならう。

飛鳥時代は四角であつたが、其式は鎌倉位迄續いた。奈良時代になつて切面をとつたのもあつたが、多くは唐戸面の様な、今日普通にみる形になつたのである。併し初めのうちは、出たところが片方即ち柱に近い方に丈けあるので、この場合其幅は割合に狭く形また整はず、原始的のものであつた。また中には全體としても奥行の方が長くて薄手のもあつたが、これは平安時代迄續いたらしい。出たところが兩方にあるのは現代のもさうであるが、古いのは其所の幅せまく、圓い部分は圓弧の様になつてゐる。時

代が降るに連れ、桃山以降は大分角張つてくるし、出た所の幅も廣くなる。遂に江戸時代に至り、其幅は全體の半分位となり、圓いところはざつと几帳面の様に角張つてくるのである。

第三十三 唐^カ居^キ敷^キ (上)

『建築字彙』に

藥居門ナドニ在テ伏圖ハ矩形ヲナシ敷石面ヨリハ突起シ居ル石ニテ門柱ヲ受ケ且扉ノ軸ヲモ支フルモノナリ。圖ヲ見ヨ(圖略)。伊勢貞丈ノ説ニヨレバ唐居敷ハ敷石ナリトアリ。

どあるが、いふ迄もなく「藥居門ナドニ在テ……」といふのは一例を擧げたに過ぎぬので、門に用ふるどのみ限らず、堂・社殿等の出入口に用ひられた場合もある(新薬師寺本堂・大崎入幡神社本殿)。最も珍らしいのをあげると、鳥居に扉をつけて、そこに用いたものである(大和・官幣大社大神社中央鳥居扉下)。また伏圖も矩形をなさないで

圓の一部分を切りとつた形即ち缺圓とでもいふ様なものや(尾道市淨土寺門)、木製葦座の様な輪廓をした薄い木の側面に銅板を巻付たのや(敦王護國寺大師堂門)、緻密精巧な彫刻を施した大きな圓形の石を裝飾につけたもの(長崎市福濟寺大觀門)等も、稀にはあるのである。

尚ほ右に引用した書物には、前記の通り——ここには略したが——「圖ヲ見ヨ」とある其圖によると、柱全體が唐居敷の上に乗つてゐる事第二百十五圖の如くである。然るに現存の實例では、古いのは大概木製であるらしいが、近來は石の方が保存期限が永いといふ關係からか、多くなりだした様である。さうして夫れは門柱を受けてはゐるけれども、これも亦古いのは半分前後のつてゐるだけで、全部乗りだしたのは割合に新しい事と思はれるのである。

以下順に説明をするが、何分教王護國寺と福濟寺を除いては、何れもたゞ平たい四角(又は圓)の

木か石かに止るから、大してかくことがないのは止むを得ない。

例の東福寺藏【大宋諸山圖】の中に、側面に渦文のある唐居敷が描いてあつたと記憶してゐる、けれど名はかいてなかつた。【營造法式】に「門砧」

とあるのが多分これに當るのであらう。我國では昔しから唐居敷といつてゐたか、或はずつと後にかういふ名になつたか私は未だ調べてゐない。

飛鳥時代

には有無未詳である。遺物のない今日判断のしようがない。

奈良時代

のは新樂寺本堂にある(第二〇三圖及第二一四圖)⑨、但し現在は全部修補のため新しくなつてゐて、幣軸と共に當初のものが一つも残つてゐぬのだから、初めからこの通りであつたといふ證據はないが、既に幣軸のところに書いた通り、これが古い型らしく思は

れるから、古社寺保存法によつた修理の際、舊形に則つて新材を以て作つたとみてよからう。果して然らば現存せる最古の形式であると同時に、堂の出入口に用ひられた珍しい例の一とする事ができやう。

東大寺轉害門のは、あれは鎌倉にやり代へたのかも知れぬ(第二頁(十六圖)。若しさうとすれば、あれも當初の大きさの通りであるかどうか判らぬ。例へどりかへても當初の通りとすれば論はないが、後に勝手な形にしたとすれば勿論當代の例にはできぬが鎌倉のものとしてもよささうである。唐居敷などいふものは木の場合は腐り易いが、あれは西向の門で、日あたりも風通しもいゝから、うまくいつたら古いのかも知れぬ。次の

平安時代

の遺物は私は未だ知らぬ。ところが

鎌倉時代

となるに相當にあるやうである。其一例として千光寺廢四脚門の夫れは先づ疑のないものであらうなせさうかといふと、扣柱礎の面などからさう考へるのである(第五卷第一號第八九・九)。(○真本文及び挿圖参照)其上にこの寺には、弘安四年の石佛だの、鎌倉時代と推定さるる五輪塔などがあるからである。尤も私は寺記——あるかないか知らぬが若しあるとすれば——も調べたことがないから、事實はどうか判らぬがたいそこにあつたものから左様に想像したのである。

其唐居敷は柱が半分乗る様になり、半分は同じ石からくり出しができてゐる。さうして其上に方立のたつたところも、軸摺の圓孔も皆はりつけてあるが、物が石であるから大變に便利である。

東福寺月華門のも同様に石であるが(第二頁第十七圖)、これは形も大分ぞんざいだし、實物は左右で孔のあけどころが異つてゐるのみならず、其何れもの孔

は、上方即ち長押の下端にあいてゐるのと一致して居らぬ。其作も丁寧でないところ等からみると果して當初のものかどうか怪しいが、古さうである。

北華堂北門のを第二百十四圖④にかいておいたが、いづれ後の修補であらう。斯様なのは元からかうであつたか否かは判別がむづかしい。般若寺樓門のも明治四十二年頃、大修理の際古いのに倣ひ新材を以てつくりかへたのである。

尾道市淨土寺の門は一間一戸四脚門であるが、其唐居敷は随分變つてゐる。こんなのは恐らくこれ丈けではあるまいか。其平面は先づ圓で、其一部分——即ち築地止についてゐる方——が切り取つてある形である、これは勿論築地止にうまくつく様にする爲めらしい。この門は觀たところは鎌倉末位らしいが、肝心の唐居敷はもつと時代が後れる様である。ことによつた元は長方形のありき

たりのものであつたのを、後に柱が圓いからこれも亦圓い方が似合ふだらう、といふ位な石工の淺薄な考へでかうして了つたのかも知れぬ。併しながら鎌倉時代と思はるゝ門についてゐるのであるから、あとのものかも知れぬが當分異例としてこゝへ掲げておくのである（第二百十八・第
二百十九圖）

（昭和三年五月二十九日稿了）

紹介

● 上代驛制の研究

坂本 太郎著

交通は社會構成の基礎的契機であり、その進歩はまた歴史發展の有力なる動因をなすのであるが、國史の研

究に於ては此の分野は今なほ未墾の荒野として取殘されたる觀なしとしない。著者はここに慨する所あつてその開拓を圖らんじしものであるが、本書は正に其第一收穫である。著者の見解に従へば交通の發達には、地方交通國內交通世界交通の三時代を劃すべく、驛遞制度は國內交通時代の著しき特徴をなすといふ、此の見地よりして驛の草創盛運衰微を精密に説いてゐる。其態度に聊か靜的に過ぐるの憾がある。尙ほ一般交通發達史に於ける驛遞制の位置乃至意義の如きも評論せられ、これによつて社會發達の過程に、驛制を出現せしむる理由、またその衰滅を來たす所以に特殊なるものがあることを著者によつて聞くを得るならば、學界の幸とするところである。（菊版二七一頁、東京國文堂發行、價二、五〇〔肥後〕

● 封建社會の統制と鬭爭

黑正 巖著

本書に收録された十八編の論文は、各々研究對象、記述の上に個々異なるものなれど其間、封建社會自らの自己否定、即ちその必然的崩壞の過程にありとする思想に